

昭和五十六年三月二十二日

第一〇八回

文跡めぐり資料

越谷市郷土研究会

鈴木程雄

第二八回 史跡めぐり案内

二日時 昭和五十六年三月三日 日曜日

一集合

越谷駅

午前八時十分集合

午前八時三十分乗車

一行先

越谷ー中目黒ー下目黒

正覚寺、祐天寺、目黒のサシマ

大鳥神社、目黒不動尊、大円寺

一帰路

目黒駅ー恵比寿ー越谷

一集合

千五百系

但し昼食は各自持参の事

霧の蝶の音聞かぬ

みせまふら

霧時雨ふりてみせまふら

おとこ

霧の音はきこえぬ

諸色高直いまに明和元

藍織の色にる池のはちす葉に

月の光もめく露の銀でい

ふる寺の濁せぬ池に橋はたる

何とそびるの袖にけり

ただたのむかおの音もけり

秋の暮

目黒の名の起源

目黒と云ふ名の由来に就き、その起源を瞭らかにする事は一寸困難である。今日傳へらるゝ所の説にも、三通りも四通りもあり、それ／＼相當因る所があり、いづれが是か非か判断に迷はざるを得ぬ。目黒不動の稱號に基いた説。土地の地味から来た説。馬に起因する説。文字に就ての説など、大いに参考とするに足ると思ふ。

不動尊の稱號 深泉寺の本尊不動尊は慈覺大師の御作で、目黒に最も古くより關係を持つて居る聖地で、其の本尊を稱して目黒不動と稱する爲め、後に至つてその稱號を村名に冠したのであらうと云ふのである。然して不動尊の稱號を目的に依つて唱へる事は、一に此の目黒不動のみでなく、關口の茶の不動は目黒不動と云ひ、その附近も目黒と稱されて居るが如く、又駒込にも目黒不動があり、今は世田谷區に移つたが、元青山四丁目にも目黒不動があつた、強も東武附會の説とも思へぬ。

地味に依る説 目黒は芽久呂から来たもので、農産物が地味に恵まれ、克く生育する意で御田(今の三田)湯田(今の目黒)なども斯うした意味を含んで呼ばれたもの、地味にめぐまれた所から芽久呂と呼び、それが不動尊の目黒と音が通じて居る結果、現在の地を冠するに至つたのであらう。

馬に起因の説 もと武藏の國は牧場が多かつたので、馬に因つて名づけられた地名が尠くない。馬込・駒込・駒園・駒林。馬引澤・駒澤・練馬・馬箱・有馬・駒場・駒井など、その例を求むるに困難でない如く、又昔は眼色・毛色を以て馬の名とし、それが地名となつたものもあるから、目黒も馬の名に因つて起つた地であらうと云ふのである。

又た此の馬の説に就て、武尊東征の御り一頭の駿馬を手に入れ、これを乗馬として愛でられた。前述の通り荏原の地方は馬に因む地名が頗る多いが、其の地方の産馬も亦た優秀なものが多かつた。特に尊が黒色の馬を乗馬とされた爲めこれを漢字に當り駿と書き、これを愛すると云ふ意から愛駿(めぐる)となり、次で目黒と轉じたと云ふ説もある。

文字に就ての説 一方文字に就ても種々の説がある、上目黒で明治維新前まで榮えて居た加藤家の家譜に見ると、天正年中の事實を記した所に『在厚郡菅刈庄免畔』と、即ち免畔と云ふ文字が記されて居る。従つて當時は免畔と書いたものであらうと云ふ説もあるが、永祿二年即ち天正よりも十餘年前に改正された『北條家人分限帳』に既に目黒と書いてあつたのだから、天正以前から今の文字を用ひて居た事は明らかである。或は免畔と云ふ文字を用つたのは、目黒と同唱であるが故に、洒落れ書をしたものではあるまいか。

驢の字義と義例 又た不動尊の縁起に『養賢大師大同三年上洛の途次妻籠の里に宿り……』云々とあり、此の字は今松澤石太郎氏方に所藏さるる慈海僧上の經卷の奥書にも認められて居る。又た『天正年中青山伯耆守の所領となるに及び妻籠を改めて目黒と云ふ、蓋し和訓相通すればなり』云々ともある。前條馬に就ての説の中にも述べた如く驢はくろうまの意であるから、馬黒即ち(まぐろ)に當り、轉じて(めくろ)となつたと云ふのであるが、肯づき難き點が尠くない。

驢は一般に黒馬の義に用ゐられて居るが、此處に例外と云ふべき古記がある。即ち仁部記に、權中納言資宣卿弘長元年七月の下に云『御牛妻黒(まぐろ)天好(用)意(今)一頭(二)文字内々(備)之』とあり、これに依つて見ると妻籠は黒馬に非ずして、黒牛の名ではなかつたのかとも思はれる。

又た此の驢に就て、詩經に『用驢濟々』とあり、昔長安府の東塢山と云ふ所に産する名馬で、帝王の乗る馬で毛が純黑色であつた、即ち驢は黒馬の類ひで、目黒の事を驢と書いて居るのもある。

源流と文字の關係 以上の如く目黒に關しては、現在用うる目黒以外に茅久呂・免畔・妻籠・驢馬などの四様があるが、然し目黒の字以外に正字のあつた確證を得ない。延寶安見園檢に妻籠とあるが、これは不動の縁起中から取つたものらしい。又た、説には免畔は免田の意で、増上寺御靈屋料であるが故に此文字を用ひたと云ふ説もあるが、これ亦た決して正しい説ではない。何となれば加藤家の家譜に免畔と記されて居るのは天正年中の條で、當所が御靈屋料となつたのは、すつたと後の寛永年中の事である。しかも加藤家は上目黒石川組の名主で、同所は寛永中一具増上寺領となつたけれども、後聞もなく御料所となつたもので免田地ではない。以上の理由から推定して見ると、免畔の文字も正字でない事が斷然出來る。要するに目黒と云ふ名稱文字の起原は、不動尊の號より出たもので、目黒と書いたのが最も正しいのではあるまいか。

爺ヶ茶屋

茶屋の位置と由来 爺ヶ茶屋のことを一名「軒茶屋」とも云つて、位置は中目黒一丁目より田貫橋、渡り、工業試験所・用道小學校を左右にして、左に海軍用地、右に水交園住宅を見て、區内三田に過ぎる茶屋坂の上の右方（但し現今の茶屋坂は、昔の坂よりも南へ寄つて居る）に寄つた所に在つた。今も年老ひた赤松が点在して、眺望に富んだ位置を占めて居るが、昔時此邊の事を味吟すと云つて居た山、然して爺ヶ茶屋の由来は、徳川三代將軍家光公が、寛永の頃屢々この目黒筋に遊獵に来て、其の都座此の茶屋に寄つて休息するを常とし、其の茶屋の主人とある百姓彦四郎の質朴なのを愛し始終「爺・爺」呼んで居られた。或時家光公は彦四郎に向つて「始終来るに汝、厄介になつて居る、何か欲しいものがあれば申出でよ、何でも取らせるから……」と申されたので、彦四郎は頗る感懐して、自分の屋敷の周圍一町ほどを頂き度い旨を申上げて之を拜領した。彦四郎の得意や想ふべしである、そして此の茶屋だけは、將軍遊獵の時でも、平常の如く茶店を開いて茶具を設けて置くや常としたと云ふ。即ち爺ヶ茶屋の名は、斯うした因縁を持つて居たのである。

目黒の秋刀魚 よく「目黒のさんま」と云ふ話を聞くが、之に就て口碑に斯く傳へて居る。八代將軍吉宗公の時、將軍或る日遊獵の歸途に、非常に疲れ且つ頗る空腹を感じたので、單身にて凛然として、平常の如く例の爺ヶ茶屋に立ち寄つて食を命じられた。勿論いふせき賤の家の事であるから、大將軍の口に合ふものゝ有らう筈がない、そこで恐る／＼その旨を申上げると、何でもよいから擇ばず直ぐ出せとの御上意、已むなく有合せの秋刀魚を焼い上げ上げたのである。處が折柄の空腹の事であり、その秋刀魚が非常に御氣に召して、満悦して歸城された。其後程經て吉宗公不圖秋刀魚の美味であつたことを想ひ出し、厨吏にそれを命じた所、厨吏も前例のない事であり、頗る困つたが、然し御説であるから、遽かに新鮮な秋刀魚を取り寄せて御食膳に上せた。吉宗公之を食べて見たけれども、爺ヶ茶屋で食つたそれと、全く比較にならない不味さに、其時の腹加減も考へず「秋刀魚は目黒に限る」と詠だ本意なげに言はれた。これ蓋し「空腹に不味いものなし」と云ふ事を諷したものである。既ち轉じて金通の美味を望むことを「目黒の秋刀魚」と云ふに至つたのも、實は此の故事から出た洒落であらう。

將軍の休息と茶代 斯の如く代々の將軍家は、非常に此の茶屋を愛せられたので、目黒筋御遊覧の節にはよく此處に休息せられること多く、園子・田樂等の御用を命ぜられ、其の外將軍家より特別の保護を受け、又た御成の都度銀一枚乃至二枚の茶代を置かれた。今ま爺ヶ茶屋の裔は島村金一氏と云ひ、下目黒一ノ八〇二に住して居るが、同家に遺る古書に依り將軍御成の年月を掲げれば左の通りである。

寛永一年一申	家光	目黒御成	
享保十七年七月	吉宗	目黒御成	
同十八年正月十九日	同	龍渡の命あり百姓彦四郎へ茶代	銀一枚
元文三年四月十三日	同	澁谷羽根澤猪狩	銀一枚
同五年二月二十八日	同	目黒地狩	同
寛保元年	同	澁谷羽根澤猪狩	
延享元年	同	同	
同二年二月	同	目黒地狩	銀二枚
寶曆二年三月二十一日	家重	同	銀一枚
同六年三月十一日	同	目黒御成	同
同十三年正月二十二日	家治	目黒島狩	同
同十四年正月二十九日	同	同	同
安永六年二月二日	同	同	同
同 年十月九日	同	廣尾筋猪狩	同
同 七年九月二十五日	同	同	同
同 年十月九日	同	同	同
同 八年十月九日	同	廣尾より祐天寺裏通り猪狩	同
同 十年二月七日	同	目黒水鳥狩	同

權八・小紫比翼塚

比翼塚と古文 目黒不動前より林業試験場の方へ行く事凡そ半町、右側に石柵を廻らし、新しい稻荷社が建立され、特に眼立つ一境がある。瀧泉寺門前代々の旗亭「角伊勢」の持地所で、昭和九年末不動尊附近の繁茂に資する爲め、不動前町會と二義組合に土地を提供して、土地の有志が改修を施して、見逃へるほど立派になつた處が、所謂「比翼塚」の所在地である。其の昔平井權八と小紫とを合葬した有名な墓で、餘りにも知られ過ぎて居る話である。「昔物語・古物會」と云ふ書の中に話を書かれて居る。

比翼塚の地下目黒村不動堂の邊頭、今は生茂れる竹叢となりて、其の跡だに定かにそれと知り難くなりしかど、天保より弘化の年間までは、偏小なる小庵ありて、之を東昌寺と呼べり、此寺即ち臨濟宗の支流なる曹化派にて、それが庭に享保年間俳諧師某が、比翼塚の縁故を略記せし石碑を新たに建てぬる。此處を總て比翼塚と言ひ傳へたり。その庵堂今は廢跡となりて、石碑のみ竹叢の中に遺りぬ。然るに行人坂上なる淨覺寺の隣地、今は農家の所有地となりし竹叢中に南無阿彌陀佛の六字を勒たる古石碑ある傍に、根府川石に比翼塚と彫りたる石碑を建てたるぞ、眞の比翼塚なると思はれ専ら言へり。此地昔は淨覺寺の境内なりしを、何時の頃のこととやありけん、住僧初いて農家に譲與したりとぞ。憶ふに淨覺寺の地當初は東昌寺の地なりしを、後に下目黒の本村に譲りしにやあらんずらん。故本村なる東昌寺には、享保年間建立したりける碑の外に墓標とおぼしきものなく、これに反へ行人坂上なる比翼塚の舊地と言習はし來りぬる處に残りし南無阿彌陀佛の石塔は、現に延寶の頃に建てしにて、二百年餘の星霜を経たりけんと思はるる、最も殊勝のものにして微妙じくも古色あり、しかはあれども、その傍なる根府川石の塔は、遙かに後の建立とおぼしく、六字の石塔に比觀れば、太く新しく見ゆるなり。そのいと濃き真穿鑿も無益の辯には似たれども、彼俳諧師が建てたりける石碑の外には比翼塚なしと思ふ者のために驚かし候かし云々。

之に依つて見れば「東昌寺が淨覺寺の地にありしにはあらずや」など、筆者獨特の推定をして居るが、淨覺寺は今の行人坂の上に在りて黄葉堂白金瑞聖寺の末寺であり、東昌寺は普化宗金洗派の寺で、江戸名所圖繪にも「虛無僧寺は龍泉寺門前と大路の西にありて……」とある如く、不動尊の附近にあつた事は疑らからであるから、二者混同は宜しくない。

行人坂上の淨覺寺 前述の如く行人坂上川崎氏邸の向ひ側に當る地點にありしは事實で、其の門前に富士見茶屋が在つた事も傳はつて居る。口碑の傳ふる所に依れば、平井權八が置られたのは此の淨覺寺で、住僧もその保護に努めたが、遂に幕府捕吏の命もだし難く、外出せしめて捕吏に捉へられた。權八處刑を受けた後、隣家の中根六右衛門と呼ぶ人が、乞ふてその體を買ひ受け、墓を建て、葬つたのが此地であつたと云ふ。淨覺寺は何時の頃か廢寺となり、白金の瑞聖寺に併合されたので、其跡は無くなつて了つて居るが、小紫の殉死を憐んで後に至つて比翼塚を建てたものであらう。

平井權八の素性 平井權八は因州鳥取の藩士で、頗る劍法に熟達して居た。或時父の間僚である本庄助太夫の犬と自分の犬とが争闘し、自分の犬が助太夫の犬に負けて咬み殺されたのを怒つて、遂に助太夫を殺して江戸に遁れ來り、其後江戸に於ても亦た罪を犯して遂に刑に處せられたのである。今徳川時代の宣告文を蒐めた『温故實錄』にある宣告文を掲げやう。

平井權八

右之者儀武州於大宮原小刀賣を切殺し金銀大に奪取追劔の本人にして其上宿次の證文をたばかり取剩へ手鎖を外づし致
脱落候段重々不届至極に付於品川磯に行ふ者也

延寶七年(二五六年)十一月三日

遊女小紫との關係 これに就ては世間が餘りに知り過ぎて居るから、國史辭典に掲げられてある一節を引用して、簡単に説明に換へて置く事としやう。即ち「小紫は江戸吉原三浦屋の娼妓なり。江戸箕輪の生れ、親のために身を賣りて妓となれり。平井權八と馴染を結びたるが、權八の刑に遭ひて死するや、その葬る所の浄法寺に至り自害して死せり。里人歎めて塚を建て、名けて比翼と云へり、明齋中の人なり。」云々。又た坊間に本文にある浄法寺に葬つたと云ふ説も傳へられて居る。又た行人坂上淨覺寺内にありし權八の墓は、後品川區大崎の安樂寺に移した由で、現に蓮理塚として同寺に残つて居るのがそれである。

行人坂と古驛

行人坂の名の起原

下目黒の東北・大崎との境界にある丸子道の急坂が即ち行人坂である。往時右側には富士見茶屋・淨覺寺があり、左側には般若塚・大圓寺等があり。目黒不動への参詣道として往き來續る坂はつたものであると云ふ。そして又た此處からは種々が物語が生れて居る。その名の起原に就ても亦た色々の説があるが、『江戸名所図繪』では

行人坂とは、白金釜町より西の方、目黒へ下る坂を云ふ。寛永の頃、羽州湯殿山の行者此に大日如來の堂を建てたる所なり、又た五百羅漢の石像あり、明和九年の造立とす。

又た『新編武蔵風土記稿』には、此の坂竝に大圓寺の事に關して、左の如き事が掲げられて居る。

下目黒村の東北の嶽にあり、寛永の頃此處に湯殿山行人坂の寺ありて、大日如來の堂を建立す、依て此名あり。今坂の中程に大圓寺と云ふ天孫行人坂の寺あり、是がその名残なるべし。

尚ほ目黒佛敎聯合會編大圓寺縁起に依れば

抑も當山は人皇百九代後水尾天皇の御代寛永年間創設せられたり、今詳しくその由來を尋ねるに、當時徳川家康公江戸城に登り天下を統治するに及び、城南の地に不良の徒多く住し、善人を苦しめ不安常に絶ざるを憂ひ、公特に湯殿山の高德大海法印を呼び給ふや、此時西南目黒の里なる此地に瑞相忽然として現れ靈異ありしかば、大海法印直ちに湯殿山より大日如來を勧請し、釋迦如來を本尊として一字を建立し、多くの行人を住せしめたるに、不良の徒何處とも消え失せたるを以て、公大いに喜び、大圓寺の寺號を給へり、蓋し行人坂なる名稱は此時より始めしものならん。

等々と諸説があるが、之を綜合して考へると、大日如來堂と云ふのは取りも直さず大圓寺の事で、湯殿山の行者とは大圓寺の開山大僧徳法印大海の事であらうと思はれるから、行者を住せしめた寺即ち行人の居る寺のある坂と云ふことから行人坂の名稱が起つたと見る點は、三つとも殆んど一致して居る。

明和九年行人坂の火事

帝國地名辭典に就て行人坂の火事を索ると『明和九年(一六三三年前)二月二十八日黒行人坂より出火、折柄西南の烈風なりしかば、白倉・飯倉・西丸下より下町を焼き拂ひ、神田・下谷・淺草を焼き千住に延焼せり。同夜本郷丸山より出火、神田・日本橋・京橋邊を焼き翌日に至り降雨の爲め鎮火す。是に於て江戸市中概ね灰燼となる。之を行人坂の火事と呼び、明暦の火事と並稱する。』とある。明暦の大火は、世に所謂『振袖火事』の事であつて、本郷丸山本妙寺から發したものである。此の辭典には行人坂の火事のその夜に、矢張り本郷丸山からも出火したと記してあるのは、後に記す如く丸山田町が火元であつた。又『新編武蔵風土記稿』には、『明和九年大圓寺失火し、延焼して江戸に及び、剩へ御城中御櫓までも此災に罹りしかば、御咎を蒙りて本堂再建の事を許されず、大目如來及過去帳以下隣寺明王院に收む。境内の地に五百羅漢の石像立てり、此の災の爲めに命を損せしもの、爲めに後人警みしと云ふ』と記してある。

六百三十箇町焼燼

安永元年二月二十九日、江戸の過半を焼き拂ふ様な火事が起つた。此の日は西南の風が激しくて、紅塵萬丈天日爲めに暗いと云ふ位の、午の刻に至つて目黒行人坂の大圓寺から火を失し、延焼して火は二手に別れ、一方は永峰町通り白金左家・麻布邊すつかり焼き、三田綱町邊・狸穴・飯倉・市兵衛町・淺南坂を焼き、一方は西久保・櫻田・霞ヶ關・虎の門・日比谷門・馬場先門・櫻田門・和田倉門・常盤橋・神田橋門等を焼き、それから門内にある諸侯の邸第をみんな焼き、日本橋南は通り三・圓丁目の西側元四日市町・萬町・西河岸邊から南傳馬町・中橋まで、北は本町・石町・西神田の町々武家屋敷全部を焼き、駿河臺・昌平橋・筋違橋門・外神田の町々、神田神社・聚堂・湯島神社その附近全部、上野仁王門・山王社及び下寺全部、護国寺・下谷邊所小路・徒士町・車坂・坂本・入谷・金杉・箕輪・吉原町・小塚原・千住大橋向掃部宿に至るまで、淺草方面は廣徳寺前通り新堀・阿部川町・烏越邊本願寺・淺草寺・傳法院及寺中、馬道・田町・新橋までも延焼した。また夕方六ツ時には本郷丸山田町から發火し、それから森川宿・追分・駒込・白山・鷺澤夕露の入口まで、鰻谷・縮手・土器店・千駄木入口根津・谷中盛應寺・竿坂・根岸と焼けのびた。翌三十日には風が變つて北風となり、または東風となり、常盤橋門外の火は更にのびて大傳馬町・馬喰町二丁目まで濱町邊・塚町・葎屋町・小網町・大飯町・田所町・雜波町・住吉町・伊勢崎町・駿河町・壺町・日本橋・中橋・京橋にまで及んで未刻になつて風がやみ大雨がふり出して、漸くどの方面の火も消えた。右の火事で焼けた町数が六百三十、その長さ六里・幅一里・死者無数と註された。

淺岡の墓と伊達騒動

芝居で有名な『千代萩』の主人公政岡の墓と云ふのが、中目黒二丁目の正覺寺にある事は、寺院の項に於て正覺寺の條に記してあるが、此の墓は五輪塔で一級に一字宛『妙法蓮華經』と刻み、最下の經の字の下正面の中央に『淨願院殿』との右に『了縁日殿』左に『大姉淑賢』と三行に彫り、裏石には貞享三丙寅(二四九年前)二月四日卒、花立に池田氏とそれんく刻んであり、周圍は石柵で圍んである。

伊達騒動實錄 伊達騒動に關しては色々の説があつて、何れを眞とも見定め難いものがある。然し文學博士大槻文彦氏の著になる『伊達騒動實錄』と云ふ書は、就中最も詳細正確なものであると云つてよい。その書中淺岡即ち三澤初子に關する條に左の如く書かれて居る。

三澤初子は綱宗の室なり。其父三澤權化清長は、江州坂田・大上二郡の主三澤親母助爲基の次男にして、濃州大垣の城主氏家志摩守廣忠の養子となりたるが、慶長五年關ヶ原の戦に大阪方に屬して敗軍し、廣忠は細川三將に預けられ、清長も從ひて行けりと云ふ、此時初子は叔母の許に寄れり。叔母は池田輝政の女にて、家康の養女となりたる振姫の侍女にて紀伊と云へり。元和三年振姫伊達宗忠の室となるに及び、初子を從へて之に従り。惜て年を経て、初子の容姿艶麗性亦た然る伶俐なるより、忠宗夫人振姫と相談し、其子綱宗の側室となさんとし、之を紀伊に謀れるに、紀伊の曰く「此女今寄りて妾が許にあれど、妾と名家の出なれば、若し正妻ならば謹みて命を奉ぜんも、側室ならば辭す」と、忠宗聽いて首肯し、明暦元年正月吉日を下し、江戸の邸に婚儀を終べり、但し妾は側室とせり。初子綱村(幼名龜千代君)外二名の男子を産む。

伊達騒動の真相 次に此の伊達騒動の真相に就てあるが、是は伊達兵部派と伊達安藝派即ち重役間の勢力争ひであつたらしく、伊達兵部派の原田甲斐を初め渡邊金兵衛等の奸佞なる輩が、反對派を陥るゝに手段を選ばず、常に惡辣非道の事のみを取てし、綱宗を誘つて放蕩に耽溺せしむる等の惡計を廻らした。之に對して正義派とも云ふべき伊達安藝等の一味は、常に不正義派の惡計に對抗して、嚴正の方法を以て綱宗を護つたのである。よく歌舞伎芝居でやる毒置の事は明らかでない。寛文二年曾河野道圓が刑せられた事があり、此時に龜千代の體守役であつた鳥羽と云ふ女も同時に罰せられたから、或は彼等が兵部と通じて毒を盛つたのではあるまいかと憶測するものもあるが、其の罪の何であつたかも不明であり且つ毒置の證據と云ふものもない。又歌舞伎でやる政岡は初子のことであるが、初子は幼君の生母であつて乳母ではな

い。然して初子が幼君擁護に苦心した事は傳つて居るが、芝居で演ずる様な事實は少しも傳はつて居らぬ。殊に初子は品川の邸に在つた綱宗侯の側らに侍して居たのであるから、上屋敷の幼君の側に始終附き添つて居ると云ふことは出来なかつたのである。

龜千代周囲の者 龜千代君の懐守役には、その家督の時から橋本善右衛門高信・大松清甚右衛門實泰・日野次右衛門信安・富田二左衛門氏親等が付けられ、幸ひに此等の懐守役は、いづれも誠忠無二の臣で、日夜君側を護つて離れず、奸黨小姓頭金兵衛・大町權充衛門等が、職務として君側の用を勤めたけれども、懐守役の監視には寸分の際もなく、如何に悪計を逞しうせんとしても、到底その志を達する事は出来なかつた。時に懐守役を陥棄せんと謀つたけれども、田村左京亮の保護があり、此の策も亦た奈何ともする事が出来なかつたのである。

淺岡の墓と異説 記録には淺岡と云ふものも、又た政岡と云ふものも、更に松前鐵之助と云ふ人物も、一切傳はつて居らない。然して仙臺の孝勝寺と云ふ寺に政岡の墓があると云ふのは、初子の墓の事であらうが、此の墓を初子の眞の墓地であると云ひ、正覺寺のそれは初子の供養塔であると云ふ説もある。又中央新聞に掲載された記事であると云ふ註をして「荏原風土記」稿に掲げてあるものは

乳人淺岡と云ふ人は實際ない。伊達安藝の妹と顯秘録に書いてあるから、安藝の子孫今の亙理氏の家を訪ねて古文書を見たり、種々尋ねたが、安藝の妹には天童右近の妾で、右近歿後宮へ奉公したと云ふ事が分つて居る許りだ。又た三澤初子と云ふ女が守役で忠義を盡したと云ふ傳へがある。此の子孫も仙臺にある、之を政岡に作つたものかと思ふ。また松前鐵之助の家は代々八千石である、その子孫に尋ねて見た處、靈廟の時の書類を焼いてその灰を壺に收め、庭中に社を建て、あつただけで、何事も傳はつて居らぬと云ふ答へであつた。

と書いてあつた。要するに之を種々の方面から考證して見ると、初子は側室ではなくて正室であり、始終品川の邸に居たと云ふ點から推しても、正覺寺の墓は供養塔でなくて、眞の墓地であると相違ない。只だ『千代萩』の作者が、假り此の生母の初子を乳母の政岡と——演劇的効果を狙つて創作したもので、政岡之屬が初子であることには、一點の疑ふ餘地もない。即ち正覺寺に存する古記録は勿論の事であり、其他初子歿後二百五十年の後、伊達家一門その他の名士に依つて、銅像まで建設されて居る事實に徴しても、是等の疑案を一掃するに充分なものがある。

權兵衛の種蒔

一時盛んに唄はれた俗謡『權兵衛が種蒔きや、鴉がぼちくる、三度一度は逐はずばなるまい……』は、今でも時々吾人の頭に浮び来て、口吟んで見なくも懐かしい唄であるが、それが自然に起源を發して居るのは奇縁である。

權兵衛が種蒔きや、鴉がぼちくる、三度一度は、逐はずばなるまい。ズンペラ………清盛き賑やかな河東節や常盤津などは案より較べものにならぬ、さうかと云つて鶴唳の意氣もなし、地唄の妙もない、同じ俗謡と云ふうちにも語句がゾンザイで、コーラスが低く、節廻しにも味ひがない——と駭しながらも、尙ほ且つ拾て難き縁のあるのは、その酒脱にして愛嬌に富み、おのづから音楽を象り、その間に一道の清新なる野趣が貫いて居るからであらう。そこに几帳面なるサムライと暢氣な鳥飼とを兼ねたる權兵衛が活躍して居る。その權兵衛は實際居た男で、知つた人は未だにその人と偽りを嫌にする。

權兵衛は將軍の狩獵に供する爲めに多くの鴉を飼ひつけてこれに餌をやる、駒場のほとりは一面に鴉が茂り、所々に松林が點綴され、今日の如く杉の森や檜・樺などの雑木林は殆んど見られなかつたと云ふ。其處へ意地の悪い鴉が嘴を尖らして、林の向ふで横目で睨めて、隙があると、聲もなく飛んで来て餌をあさる、盗み食ひをする。それを權兵衛が軒下の窓中に見つけて、羽聲を立て、追拂ふ、鴉は羽ばたきをして隠れてしまふが、主人の姿が見えなくなると、又た性懲りもなく下りて来る。更に遠拂ふ。幾度も繰り返すうちには、流石の權兵衛も堪らなくなつて焦れ出して、聲を限りに床を踏み立てながら家を飛び出す、鴉は周章する風もなく堂々として退却する。權兵衛はそれが憎いとて、或時は林の中まで突入つて追拂ける、排莖にもせまほしかつたと云ふ。

凡て將軍狩獵の地は、平時人の入るを禁斷され、大名さへも顔を見なかつたものである、弓や銃砲の飛道具を使用するなどは思ひもよらない。鴉が勤めの邪魔をするとして、弓や銃砲を放つては相成らぬ、最初飛道具を見せられた時は、鴉も驚いた、本物でないのと知ると、益々横着の本性を發揮して、追はれても直ぐには逃げない、逃けても五六間、中には飛ばずに跳ねて退く、それを籠の蔭で眺める鴉は、蓋し見ものであつたらう。

云々と書いて有る、文章が今少し上手ならば、もつと面白く此の風景が讀まれるかも知れぬが、兎に角暢氣な權兵衛と、横着な鴉との有様だけは、此の一文から窺ふ事が出来る。

川井翁太郎氏に就て聞くと、同家の祖初代權兵衛は、享保二年（二一八年前）に相模國野津田より来たもので、親子を捕る名人であつた由。其後祖父の代に濱り、先祖以來の住居が古朽せんとしたので、粗糲より木材を運び替へたが、其家今は取壊ちて跡方もなし。本道に村下助が初代權兵衛の友人で、明治維新まで山内某と駒場の地守を勤め……云々とあるが、此れは恐らく何代か後の權兵衛であらう。

正覚寺

中目黒3丁目1-6

元和5年(1619年)、日榮上人によって創建された日蓮宗の寺院である。初めは神文谷法華寺(今の円蔵

寺)の末寺であったが、元禄4年(1691年)に法華寺同様、幕府から弾圧を受けたので、急ぎよ身延山久遠寺の末寺となり、その難を免れた経緯がある。

やがて、京都の行徳寺から4世日叡上人を迎え、後の隆盛の基礎を築いた。

しばらく栄えた寺も、やがて衰えさんたんたるありさまとなったが、安政年間(1854~1859年)に5世日慈、6世日勝上人の努力により、元通りの復旧を成し遂げた。

このことから、同寺では日叡・日慈・日勝の3上人を、正覚寺中興、再興の恩人と呼んでいる。

●浅岡の局との縁故

境内には、仙台の伊達家第3代綱宗の側室である浅岡の局、三沢初子の墓(都旧跡)がある。

三沢初子は、浄り・歌舞伎などで有名な「伊達騒動」に登場する“先代萩の浅岡の局”のモデルといわれている。初子は、4世日叡・5世日登の両上人に深く傾倒していたし、

父母もここに葬られたということから、正覚寺との縁はこのほか深かった。彼女が亡くなったあと、遺言によってその邸宅は寺に寄進され、本堂・庫裡などの建築にあてられた。また、子の伊達頼村公(幼名亀千代)も母を弔い、その後当山に特別の保護を加えられたという。

遷葬の頃には、昭和9年に建立された三沢初子の銅像もある。この像のモデルになっているのが名優6代目尾上梅幸の弟子尾上梅朝で、彼の厚意による女形の扮装をもとに製作されたものである。

●鬼子母神像

鬼子母神堂に、伝教大師の作といわれる鬼子母神像が安置されている。鑑歎あらたかた、三沢初子が亀千代の武運長久を祈ったと伝えられている。



三沢初子像

祐天寺

中目黒5丁目24-33

享保3年(1718年)祐天上人によ

て開山された浄土宗の名刹である。

祐天上人は關東国石城郡新倉村の生まれで、12歳のとき芝地上寺内の池徳院に入り得度した。のち龍通上人の弟子となり、元禄12年(1699年)下総の大塚寺の住職を勤め、以後弘経寺、小石川伝通院を経て正徳3年(1713年)、77歳のとき増上寺の住職となり、大増正に昇進した。

当時、下目黒村の善久院で念仏修行を勤めたことがあり、かねてから念仏道場を開くことを念願していたが、果たせないまま享保3年、82歳で他界した。

遺志を継いだ高弟祐海上人は、得度吉宗や寺社奉行に働きかけて、新しい寺院建立のために尽力した。しかし、折からの幕府の厳しい制約のため思うように事が運ばず、やむなく祐天上人ゆかりの善久院を買い取り、ここに本堂・庫裡を完成(享保5年)させ、祐天上人の没年を開山とした。享保7年(1722年)には、得度から明頭山祐天寺の山号と寺号

が授けられた。
境内にある祐天上人の墓は、昭和17年、都の旧墓に指定された。

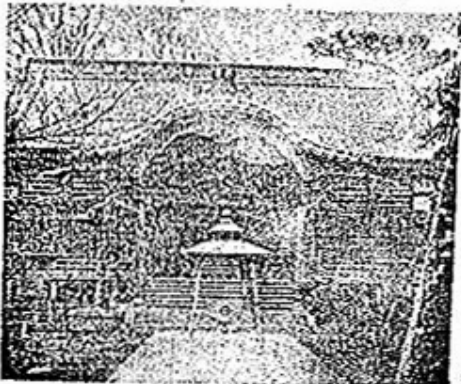
●本尊 阿彌陀如来坐像

本堂左側の阿彌陀堂に安置されている阿彌陀如来坐像は、名工安阿弥快慶の傑作といわれる。

このほか、本堂には元禄~享保年間の大仏師法橋石見の伴である木造祐天上人坐像(都有文)、殺石心経1巻や岩紙金字法華經卷第3の1巻(いずれも都有文)など逸品が多い。



木造祐天上人坐像



祐天寺本堂



祐天上人の墓

目黒のさんま

江戸時代の初めのころ、田道橋を渡り三田方面に通じる板の上に、一軒の茶屋があった。一軒茶屋とも籠ヶ茶屋とも呼ばれるこの茶屋を舞台にしたといわれているのが、落語好きならばだれでも知っている「目黒のさんま」。

◇

- 秋の一日、將軍は家来を連れて鷹狩りに出かけた。茶屋に寄った將軍は食事を命じたが、草深い郊外の茶屋に將軍の口に合うものがあるはずがない。その旨を申し出たが、
- ・「なんでもよいから早く出せ」とのこと。

やむを得ず、ありあわせのさんまを出したところ、脂の乗ったさんまの味は格別だったのか、將軍は極めてご満悦の様子であった。

このさんまの味を忘れかねた將軍は、後日、城内でさんまを食べたいと家来に命じた。家来は、さっそく日本橋の魚河岸へ早馬を飛ばして、極上のさんまを仕入れてきた。

さて、困ったのは料理方。こんな脂の強いものを蒸し上げては毒だと思ひ、蒸して脂をとってしまった。そのうえ、骨があるといつて小骨まで毛抜きで抜いてしまったものだから、さんまのだしがらのようなものが出来上がってしまった。

將軍の前に出されたさんまは、「秋刀魚」と書かれるくらい黒く美しい刀身のようなさんまではなく、脂を抜いてバサバサ。將軍は口にす

るなり

「ああ、これこれ、これがさんまか」

「御意」

「うむ…。なんじゃ、こりゃあ、これ、このさんま、いずかたより仕入れた」

「はっ、日本橋は、魚河岸でございます」

「なに、魚河岸？ それはいかん。さんまは目黒に限る」

というのが落ちた。

農村であった目黒でさんまがとれるわけがない。それなのに下階に練い將軍は、ただ一度だけ口にした目黒のさんまに固執した。この將軍の無知さと「さんまのことならまかせてくれ」という庶民の優越感が落語「目黒のさんま」を生んだということだ。

◇

この話が実話であるかどうかは別として、八代將軍吉宗以後、歴代將軍や大名が鷹狩りの帰りに、この茶屋に腰をおろすのが一種の行事となっていた。そして、十代將軍家治が立ち寄ったときには、茶屋の主人荻田郎平作りの団子や田楽を差し出した、という記録が残っている。

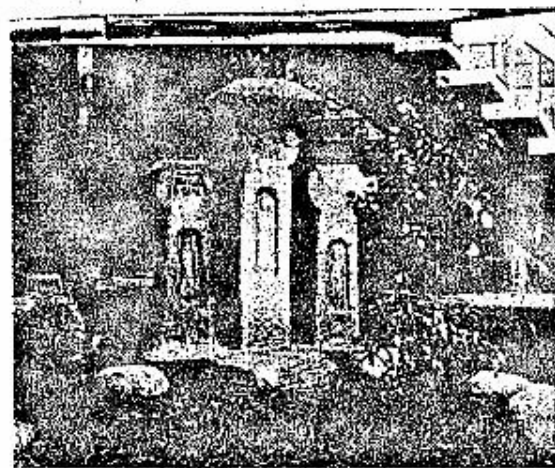


区民センター側の庚申塔跡

大聖院

下目黒3丁目1-3

天台宗、滝泉寺の子院。弘治3年(1557年)、良願僧正の開基。境内にある三基の禪部式灯ろうは、三休地蔵といわれ、もと三田の千代が嫡にあつた九州島原の藩主、松平定綱の下の屋敷から移されたもの。俗に切支丹灯ろうと呼ばれている。



切支丹燈籠(大聖院)

クリシタン灯ろう

大聖院の境内に、ちょっと変わった石灯ろうが三基ある。これは、クリシタン灯ろう、または織部灯ろうと呼ばれているもので、「かくれクリシタン」の遺物ともいわれている。

織部灯ろうというのは、茶人千利休の高弟で、利休亡きあと一流をなした古田織部が考案したもの。キリスト教の影響を受けてはいるが、直接クリシタン信仰と関係をもっていたかどうかは不明である。

この灯ろうは、元千代が崎の松平主殿頭（とのものかみ）屋敷跡の小祠にあったもので、大正15年にここに移された。新田義興の妻千代の墓碑であるともいわれている。

さて、かくれクリシタンの話に戻るが、江戸時代、キリスト教は厳しく迫害され、キリスト教信者は隠れながら信仰を続けていかなければならなかった。直接キリストの像やマリア像を拝することができないので、代わって形の似た織部灯ろうを信仰の対象にしたものらしい。そして、人びとを避けるため、またはほかの人が嫌ったためか、クリシタン灯ろうには、禁忌な伝説が多くある。次の話も、かくれクリシタンに関係しているのかも知れない。

寛政のころ、土手四番町に住んでいた春日半十郎という旗本の家で、夕食時になると、食卓が宙に舞い上がるといふ珍事が毎日のように起こった。初めは、キツネかタヌキの仕業か、神仏のたたりと思って修験者をお呼びしてもらったが、いっこうに効き目がない。そのうちに、付近の家にも次ぎ次ぎと同じことが起こるようになった。

そのうわさを耳にした戸田三蔵という旗本が、春日の家へやってきて「それなら拙者が封じてやろう」といって、奉公人を全部集めて住所を開き、近ごろ雇い入れた3人を解雇してしまった。

すると、その夜から何も起こらない。不思議に思った春日が尋ねると、

「実は、拙者の家でも同様のことがしばしば起こったので、近所の者に聞いたところ、目黒の者を雇い入れると不思議なことが起こるといふので、目黒者を全部里に帰したら、別案なくなった」

戸田はこう答えたという。

◇

このほかにも、目黒者を嫁にもらうとたたりがあるとか、目黒者を雇うと夜中に奇妙な振る舞いをするといったような伝説がいくつか語り伝えられている。

大鳥神社

下目黒3丁目1-2

日本武尊を祭る目黒で最も古い神社の一つで、国常立命・弟橘媛命が合祀されている。

景行天皇の御代、目黒の地に国常立命を祭ったお宮があった。日本武尊が東方征伐の途中、当地をお通り

になった。そのとき、家来が大ぜい目の病気にかかってしまった。すると日本武尊の夢の中に国常立命が現れ、「木の実がよくきく」とお告げになった。尊が家来たちに早速、木の実の汁をつけさせると、たちまち治ってしまった。これをお喜びになった尊が、十握・八握の剣を奉納された、という話が伝えられている。

大鳥神社は、この日本武尊東征の遺跡の地に大同元年（806年）創建されたもので、現在の社殿は、昭和37年に完成したものである。

●太々神楽（剣の舞）

大鳥神社に古くから伝わる太々神楽は、日本武尊の徳をたたえ、十握の剣を背に、八握の剣を使って舞うもので、毎年9月の例祭（9日に近い土・日曜日）に社殿で行われる。

大鳥神社



滝泉寺 (目黒不動)

下目黒3丁目20-26

天台宗深谷山寛永寺の末寺で、目黒不動尊縁起によれば、「慈覚大師が少年時代、現在の地に宿をとったとき、神人の夢を見た。その後大師が青年になり、唐に留学して、ある日長安の青竜寺を訪れ不動明王を拜んだら、それが少年のころ靈夢に感じた神人と同じ姿であった。大師は奇異に感じ、帰朝後さっそく不動尊像を彫刻し、これを目黒の地に安置した」とある。

慈覚大師創建ということは、確かな根拠があるわけではなく、おそらく大師が東国下野（今の栃木県）の出身であったということから、関東・東北に多い慈覚大師創建と伝える寺院が多いことを一にするものである。

創建の年代についても、弘治3年（1557年）堂宇改築の際、棟札に「不動明王心身安養呪願成就、嗣泉長久、天安2年」とあるのを発見したという伝えや、貞観4年（862年）清和天皇から「壽観」の勅額を賜ったという伝えもある。また、「目黒不動尊縁起」は大同3年（803年）開山、天安2年（858年）堂宇造営として

いるなど、創建年代については天安2年説、貞観年間説、大同3年説など幾つかの説があるが、いずれも確かな根拠があるわけではない。

江戸五色不動の一つに数えられた由緒ある不動尊で毎年、約150万人の参拝者が訪れている。

●家光公が大伽藍を建立

3代将軍家光は、深く当山に帰依していたので、寛永11年（1634年）堂宇を造営した。当時は元和元年（1615年）の火災で仮本堂しかなかったため、本堂を再建し、鐘楼・観音堂・仁王門を修造、また種々の仏像・宝物を寄附したのである。さらに目黒筋に遊覧の際、駕籠を寄せるために御殿を新設するなどして、たちまちのうちに旧時以上の宏壮華麗な寺になったという。

以来、幕府の保護が厚く、江戸近郊における最も有名な参詣行楽地となり、門前町もにぎわった。搦島天神・谷中天王寺とともに、「江戸の三宮」と呼ばれた富くじが行われたことも、繁栄の一因となった。

大伽藍は、戦災で焼失したが、それらの堂塔は昭和24年に再建された。しかし、同53年5月、再び本堂を焼失した。56年中の大本堂完成を目指し、再建工事にとりかかっているところである。

●抜結の滝

慈覚大師が長安の青竜寺に清い滝があったのを思い出し、試みに抜結

（煩惱を打ち砕く仏具）を投げたところ、たちまち泉がわき、滝となったと言いつたといわれている。

二条の清水が銅製の竜口から注いでおり、不動講の水垢離場となっている。近年水量は減ったが、一年中水が切れることはない。

●前不動堂

抜結の滝の左手にあり、本尊は木造不動明王立像で、庶民信仰の便を図ったものとも、本堂に祈願するための徳を積む修業の場であったともいわれる。

堂にかけてある「前不動」の額の筆者が、享保7年（1722年）に亡くなった佐々木玄庵であることから、それ以前に建てられたものであることがわかる。

昭和48年に復元工事が完成、当時の美しい姿に再現された。

●青木昆陽の墓

サツマイモの先生で知られる青木昆陽の墓が、滝泉寺裏の墓地内にある。この墓碑は、昆陽が生前邸内に立てておいたものといわれ、碑の正面に「甘藷先生墓」と楷書で書かれている。

毎年10月28日には、甘藷先生をしのんで「甘藷祭り」が開かれ、サツマイモや大学イモを売る店などが出て、大勢の参拝客でにぎわう。

昆陽が亡くなったのは明和6年（1769年）10月12日だが、同寺の縁日にあたる28日に供養を兼ねて、祭りをするようになったのである。

抜結の滝



前不動堂

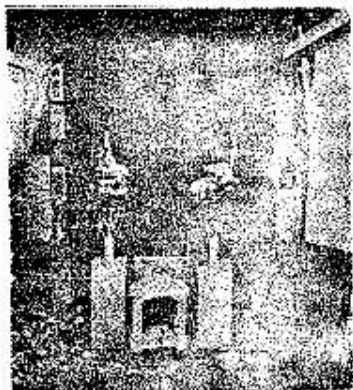


青木昆陽の墓

比翼塚

下目黒3丁目

因州(今の鳥取県)の藩士、平井権八は罪を犯して江戸に逃れたが、延宝7年(1679年)ついに捕えられ処刑された。この権八に思いを寄せる遊女小紫は、悲嘆して墓前で自害した。人びとは、これを哀れんで比翼塚を建てた。その塚が、目黒不動仁王門の前50mほどのところにある。



比翼塚

海福寺

下目黒3丁目20-9

黄檗宗、宇治万福寺の末寺。万治元年(1658年)、隠元禪師が開山。明治43年、深川万年町から現在地へ移転した。文化4年(1807年)、深川宮岡八幡の祭札のとき、永代橋墜落による多数の死者の霊を弔った塔が、山門近くにある。都有形文化財に指定されている梵鐘は、鐘樓がない



海福寺梵鐘

成就院

下目黒3丁目11-11

天台宗、滝泉寺の子院。本尊は蛸薬師如来。一般には蛸薬師と呼ばれ、

疫病よけの仏として知られる。浮世絵師鳥居清長作の絵馬「顔面著色矢根五郎図」(国の重要美術品)が伝わるが、今は、東京国立博物館に所蔵されている。



絵馬「顔面著色矢根五郎図」

納薬師の御誓石
いぼができた時など、薬師の真言オンコロロセンダリマトウギンワカを唱えて患部をなでると効目があるという。もっとも川柳子は、

いぼの癖はお出来そりな所へかけ

などとひやかしている。

この寺に、文化三年(1806)日本橋新市場の和泉屋半治郎が寄進した鳥居清長作の絵馬『顔面

著色矢根五郎図』(重要文化財)が伝わっているが、いまは国立博物館の所蔵となっている。

め本堂に安置されている。この梵鐘は、日本上代の古鐘を手本とした特異なもので、江戸時代につくられた梵鐘の中では、類例が少ないとされる。作者は、武州江戸中村嘉兵衛藤原正次で、天和2年(1682年)の作。



原塚阿彌陀



羅漢寺銅鐘

羅漢寺

下目黒3丁目20-11

黄葉宗の寺院で、元禄8年(1695年)に松雲元庵禪師が本所五ツ日通り(今の駒込区)に創建。明治20年、本所緑町へ移され、さらに同42年、現在地へ移転した。

松雲禪師は、もと京都の仏工。九州耶馬溪の羅漢像を見て一念発起し、彫刻の教えを受けつつ、江戸で羅漢500体のほか、釈迦三尊など38体を完成させた。そして元禄8年、将軍から広大な土地と「天恩山羅漢寺」の号を与えられたのである。

●五百羅漢像

羅漢とは阿羅漢のことで、小乗仏教の悟りを極めた修行者であって、世間から尊敬を受ける資格のある聖者を指す。五百羅漢は、仏滅後、第1回の精集に参加した500人の阿羅漢のことである。

羅漢寺の五百羅漢は木彫で、全部松雲禪師が自ら彫刻したという珍しいものである。長い年月の間に破損・散逸して、現在は237体しかない。像の表情はすべて違い、夢を食うという漢の像や、仏はわが腹中にありと開腹してみせている像など、見て回れば興味は尽きない。

木造釈迦三尊・石造松雲禪師塔とともに、都府有形文化財に指定されている。

●原塚狗懸碑

大きな自然石に「原塚狗懸碑」と彫られ、その右に「移動演劇さくら隊」左にはサイン風に「徳川夢声書」とある。

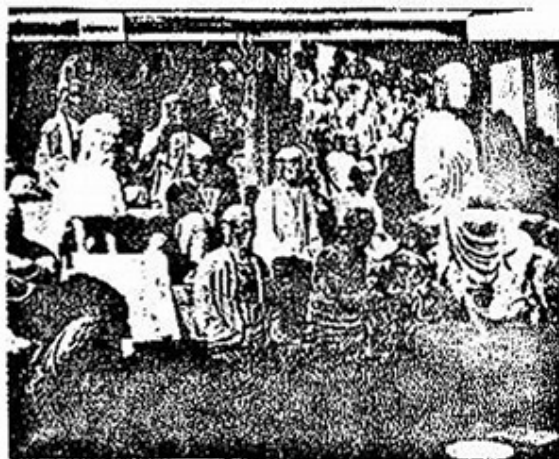
広島で被爆し、倒れた9人のさくら隊員の慰霊碑である。同寺の2代庵主小久江慈雲尼が、さくら隊員や故夢声氏と親しい関係にあったため、同寺の境内に建てられたという。

●新造

安永3年(1774年)江戸の鑄物師、藤原重行の作で、国の重要美術品。昭和26年に日比谷の世界平和祭に出品され、「平和の鐘」と呼ばれた。

●お経観音

昭和初期、廃寺同様にとなっていた当寺の復興のため、身命をかけて努力してくれたのが安藤妙照尼である。妙照尼は、もと新橋の芸妓「お嬢さん」である。遺言により、本堂前の観音像の下に納骨され、その観音像は「お嬢観音」と慕われている。



五百羅漢(羅漢寺)

太鼓橋

下目黒1丁目

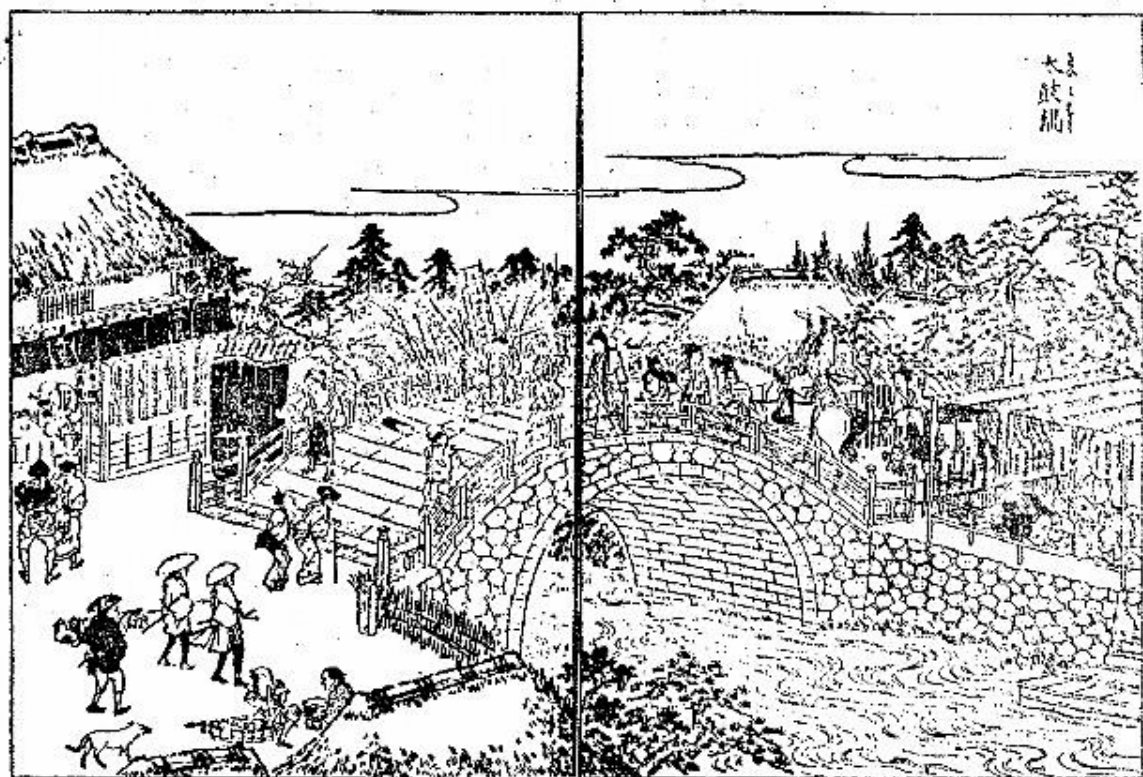
行人坂下の目黒川に架けてあった太鼓橋のような石のアーチ橋。享保末年、木境上人の建造と伝えられるが、延享年間(1744~1748年)、四国の僧一侶によって造られたともいわれている。その後、宝暦14年(1764年)に江戸八丁堀の商人などが資材を投じ、明和6年(1769年)に完成した。

目黒不動参詣道中の奇観として江戸名所の1つであった。明治になって平橋に改修されたが、大正9年の豪雨で洗された。その後も改修・改造がなされ、現在に至っている。

蟠竜寺

下目黒3丁目4-4

浄土宗、芝増上寺の末寺。行人坂下にあった徳明院という小庵を、宝永7年(1710年)に増上寺の齋堂上人が禅院に改め、現在地に移したものと伝えられる。そのため、今も参道左手に「不許宰肉酒入山門」という結界碑が建っている。この寺は、本堂右後ろの洞穴に、弁財天が祭られていたところから、「岩屋弁財天」の名でも知られている。本尊の阿彌陀如来坐像は青木造り、漆箔の藤原時代末期の作品で、都府有形文化財に指定されている。



大円寺

下目黒1丁目8-5

天台宗、滝泉寺の末寺。寛永年間(1624~1643年)、湯殿山の行人、法印大海が行人坂に大日如来堂を建てたことに始まると伝えられている。境内には、都内唯一の石造五百羅漢像(都有形民俗文化財)がある。同寺は「振袖火事」「軍町火事」と並び「江戸三大火」の1つ、明和9年(1772年)の「行人坂火事」の火元となった寺である。城中のやぐらまで火災が及んだため、70年間も幕府から再建を許されなかった。五百羅漢は、この明和火の遭難者供養のため建立されたものというのが定説となっている。本尊の清涼寺式木造釈迦如来立像は、昭和32年に国の重要文化財に指定された。また裏山には、八百屋お七の恋物語の吉三の後身と伝えられる西運和尚の墓がある。



清涼寺式釈迦如来像(大門寺)

石像にはそういう銘記がないそうだが、しかし都内唯一の石造五百羅漢というにも都の文化財指定を受けた。(都野土資料)

ところで、この寺には八百屋お七にまつわる伝説がある。これもまた火事に関係のある話。お七は恋しい小姓の吉三に再会したいばかりに自家に放火して捕えられ、江戸市中引廻しのお七が森で火刑に処せられたという。

井原西鶴の『好色五人女』をはじめ数かずの物語に書かれ、「お七さんは駒込の吉祥寺」とのぞきからくりの語りにも残っているが、諸説紛々として真相は不明である。

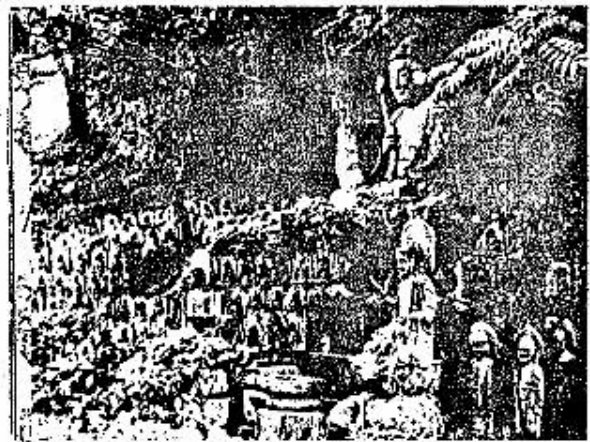
小姓の名はじつは左兵衛で、吉三はお七を煽動したならず者だともいえる。その吉三だか左兵衛だかが、お七の菩提をとむらうため剃髪して西運(二説に西念)となり、行人坂にの明王院境内に念仏堂を建てたという(上目黒湯殿寺の項参照)。その明王院という寺はもと大円寺の下にあったが、明治の初めに廃寺となり、建物は寿福寺へ売られたが、仏像仏具などは大円寺へ引きとられた。その中に西運の像や念仏鉢がある。彼はその鉢を叩きながら浅草観音へ往復し、一万回の念仏修行をしたという。寺には西運とお七の関係を記した由来書もあるが、これは伝説としておく方が無難であろう。しかし、西運という僧がいて、坂を改修し、橋(木橋か)を架設したなどの史料は存在しているし、墓も大円寺の墓地にあるから、お七との関係は別としても、社会奉仕に努めた善僧が明王院にいたことは確かである。

明和九年は、大火のほかは諸國の水害もあり、年号を安永と改めたが、なお天災は止まず、年号は安永と改められたが、なお天災は止まず、諸色高直いままに明和九という落首もつくられた。

明和九年の火元寺は幕末の嘉永元年(一八四八)になり、やっと島津侯の力によって再建され、その時五百羅漢は現在の場所に移建された。この羅漢像は明和火の遭難者供養のために建立されたというのが定説だが、東京都教育委員会の調査によると、

が、お七の菩提をとむらうため剃髪して西運(二説に西念)となり、行人坂にの明王院境内に念仏堂を建てたという(上目黒湯殿寺の項参照)。その明王院という寺はもと大円寺の下にあったが、明治の初めに廃寺となり、建物は寿福寺へ売られたが、仏像仏具などは大円寺へ引きとられた。その中に西運の像や念仏鉢がある。彼はその鉢を叩きながら浅草観音へ往復し、一万回の念仏修行をしたという。寺には西運とお七の関係を記した由来書もあるが、これは伝説としておく方が無難であろう。しかし、西運という僧がいて、坂を改修し、橋(木橋か)を架設したなどの史料は存在しているし、墓も大円寺の墓地にあるから、お七との関係は別としても、社会奉仕に努めた善僧が明王院にいたことは確かである。

しかし、今では吉三伝説の石碑まで建てられるようになった。



五百羅漢石像(大門寺)

吉三発心
ただたのむかねの音きけよ秋の暮

江戸時代徳川氏は江戸鎮護のため五色の不動尊を江戸の五方所に安置した。この五色の不動のうち目白、目黒、目赤の不動を三不動と呼び、この三不動に目青、目黄の二不動を加えて、これを総称して五色不動と称した。

五色不動尊の五色の意味は、密教では宇宙のすべての現象は地、水、火、風、空がその本体であり、この地、水、火、風、空の色彩で現わしたものが青、黄、赤、白、黒の五色であるといっている。またこれに対し五色不動とは目に色があるのでなく、五方眼、東、西、南、北、中央の五方角を意味するもので、目白、目黒、目赤、目青の四不動はすでに將軍家光以前よりその名は知られていた。將軍家光はこの四不動にさらに目武不動を加えて「五眼不動」としたのは家光の寛永年間中期のことである。

なお因みに五色の意味については新仏教辞典に「(梵)パンチャ、ワールナ五正色、五大色と訳)青黄赤白黒の基本色をいい、インドの教団では法衣に用いてはならない色とされ、華美の色と認められた。極楽浄土の莊嚴の色や千手観音の持ち物の一として五色雲があり、密教の五智、五仙、五字等の教義や方向に配当される」云々とみえている。

いずれにせよ以上五色不動中目白不動は三不動さらに五不動中の随一と考えられ、徳川幕府に厚く尊崇され、武家、庶民層にも深く信仰され、その加護を蒙るものも多く、その名は全国的に知られていた。目黒不動も目白不動とともに有名で、その靈驗あらたかたで信仰者が多く、今日の目黒の地名は不動尊に由来するといわれている。目黒不動の靈驗は、三代將軍家光がこの地に鷹狩りにや奇られて以来家光の帰依を得たのはじまる。また目赤不動は伊賀岡赤目山の住職万行和尚(修験者)が不動明王を持仏として廻國の修行し、この修験者の定意によって信仰者を多く集めるようになった。

(一) 目白不動尊

(豊島区高田二ノ二ノ三九)

(二) 目黒不動尊

(目黒区下目黒三ノ二〇ノ二六)

(三) 目赤不動尊

(文京区本駒込一ノ二〇ノ二〇)

(四) 目青不動尊

(世田谷区太子堂四ノ一五 教学院内)

(五) 目黄不動尊

(台東区三ノ輪二ノ一四 永久寺境内)

目黒不動尊

江戸時代五色不動随一として有名であった目黒不動尊は、天台宗上野寛永寺の末寺で、奉釈山滝泉寺と称した。わが國は中世以降発達した神仏習合思想によって、山内には別当寺滝泉寺が建立された。江戸名勝志に「奉釈山滝泉寺上野末、目黒不動別当也」とみえている。

不動堂は目黒川とその支流の羅漢寺川との合流点の台地面の南端に位し、豊かな湧水にめぐまれ古くから不動信仰の靈地として知られ、江戸市民層に篤く信仰されていた。

江戸時代には不動の森を中心とするこの地域は、放鷹に適していたので、三代將軍家光もたびたびここに出獵した。

家光は不動尊に対する帰依が厚く、同寺は元和元年(一六一五)近隣在家よりの出火によって、踏堂ごとく烏有に帰したが、その後寛永七年(一六三〇)生順大僧正のとき家光の帰依を受けて再建に着手した。当時村人に目黒御殿といわれるほど宏壮輪奐の美を極めた堂塔伽藍が四力年の歳月を費して整備されたのである。

その後不動尊の靈驗あらたであることが江戸市民の間に流布されると、靈驗を求めて老若男女が雲集し名実ともに江戸五色不動随一の地位をきすに至った。また將軍家光ほかの將軍も不動尊を篤く信仰したが、ことに五代將軍綱吉の生母桂昌院は篤く不動尊に帰依し、五百羅漢像を寄進している。

その草創は縁起によれば、大同三年(八〇八)天台座主第三祖の慈覚大師によって開山された古寺で、天安二年(八五八)この地に堂宇を造営し、貞觀二年(八六〇)には清和天皇より「奉釈」の勅額を賜ったので山号を「奉釈山」としたと伝えられ、中興は慈覚大師正であるといわれている。また不動尊の縁起については江戸名勝志に「当山は日本武尊を祭る所也、慈覚此所を經歷の時不動の像を彫刻して神体に擬す其故は日本武尊富士の野に狩し松ふ時凶徒火を放し尊を奪て其時畫の劍を抜て狩犬の綱を切つて放し然來る草を難れ給ふ其時体左に大の切れ端を持右に劍を揮て立給ふ所不動の形に似たるを以て是に比する所なるとぞ」云々とみえ、また江戸名所図会にも江戸名勝志とはほぼ同様の縁起を記している。(いずれも出所は同一と考えられる)

目黒不動尊の場合いかにして日本武尊の神話の縁起となったのかその出所は詳かではないが、このことについては加藤唯堂「日本風俗志」には古く祖武の地に足跡を印したまいし日本武尊の伝説は諸方に散在している。したがってこの説は專に付会した説であると記しているが、あながち付会であるとい概に言い切れない節もあるやに考えられる。

わが國は古来より荒ぶる神を崇拜する風習が強く、ことにスサノオノ命以来荒ぶる神の信仰がさかんであった。荒神は修験道と日蓮宗で主として祭祀した神で、本地仏は文殊菩薩とも不動明王であるともいわれているが、その節はいずれか定かでない。

